音声英語の文法 ——強勢、高さ、息つぎの関係——

五 十 嵐 康 男

I. 本稿のねらい

私たちが日常使っていることば（言語）には 2 つの種類がある。文字を使って書くことばと、もうひとつは、聞いたり話したりするとき使う音声のことばである。

書くときには、英語については「英文法」といって、いろいろな単位の決め方や文の構成についてのルールの説明があり、そういった特徴を理解して素早く実際の文にあてはめることによって、その文がどういうことを伝えたいのかが読みとれる。

一方、聞くことに関しては、書くときのような決められた“文法”がはっきり示されていない。「英語を聞くときにはこういう点に注意しよう」といった提案がなされるが、書きことばの文法のように系統だったものはない。

文法には、まず、ことばの理論的な構造分析がある。もうひとつの面として、分析されたことばの特徴を、どう教育に利用するかという応用面がある。理論とその応用は別だとして、それぞれの分野で独自の研究をするのはそれなりの理由があるが、たとえ理論とは言っても実際例からすっかり離れることはできないし、応用はもちろん理論をもとにしなくては何の展開もできない。ひと頃隆盛をきわめた生成文法も、“生成理論”と言われるように理論面を重視しているが、その発想の出発点は具体的な例（デー

タ）である。

生成文法より一時代前に盛んだった“構造言語学”では、分析の厳密さを期するために、実際に認められるデータを越えて理論構成する、つまりルール作りをすることを避けたが、ことばの教育、特に外国語教育、という観点から考えれば、この二つの理論、生成理論と構造言語学は日本で言われてきたような、まったく相対立する反対の考え方ということにはならない。私は外国語教育、具体的な点では日本語話者にとっての英語教育、という点を分析と理論構成の土台と考えているので、本稿のデータ分析及び戦略方針の提示はその考え方にそって進められている。

つまり本稿は演繹的分析であり、実際のデータをもとにルール作りをするが、そのルール、すなわち“文法”は、広範囲なデータによる証拠固めは行われておらず、それは今後の追認が必要ということである。

以上の考え方に立って、音声英語のルールの中で、第一段階として取り扱わなくてはならないのは強勢であり、それと高さ、息の休止の関係をまず見てみようと思う。

II. 分析材料

音声としてのことばは、書きことばにくらべて注意すべきバラエティが多い。“注意すべき”と言うより“習得しにくい”というほうが正しいかもしれないが、音声は時間的にとどまっていないので、例として提示するのがむずかしい面をもっている。

これは、音声英語の文法を考えるときに、どのバラエティを分析の材料とするかに関係してくる。例えばイギリス英語とアメリカ英語といわれる2つの音声英語は、ひとくぎりの発話を取り出してみるとかなり違っている。これは主にイントネーションの違いであるが、この違いをごちゃまぜ

に考えると有効な文法ルールを作れない。

同じイギリス英語といっても、例えば NHK の BS 放送でのニュースのレポーターのことばは、少くとも 2 種類が聴かれる。そこで、まず第一に音声英語として共通性の高い特徴を取り扱い、つぎにバラエティによって異なる特徴を扱うのがよいと思われる。

以上のことをふまえて、ここでは、アメリカ英語を直接の材料として、いろいろなバラエティの英語に共通する程度の高い“強勢”を中心に見てみようと思う。ここで使う材料は、2001 年にアメリカのアカデミー男優賞をとったデンゼル・ワシントン (Denzel Washington) とのインタビューの一部である。[1]

III. 1. リズムについて

日本語を母語とするものにとって、英語のしゃべりことば（音声英語）を習得するときいちばん最初に練習するべき段階はリズムである。

日本語はシラブルがリズムを作るとき大事である (syllable-timed) のに対し、英語は強く言う音が中心となってリズムを作る (stress-timed) という大きなちがいがある。これが日、英の音声文法を比較するときのいちばんのちがいである。

いままでの日本の英語教育には、この点についての統一的理解がなく、必要不可欠な習得段階を欠いた戦略をとってきた。これはどうしても修正しなくてはならない。

英語では、伝えたいことと大いに関係ある語（内容語）は強く言われ、相手に意味上だいじなことばを聞き取りやすくする。こういった語は、言いやすいようにだいたい一定の間隔をおいて出てくるように話す。話す者に発音しやすく、聴く者に内容を聞き取りやすくするようになっている。

こういう英語の音声面についての特徴は知られているが、単に音声学の講義の一部として教えられているに過ぎず、英語習得のためのだいじな訓練として捕らえられていないのが一般的である。一般的には取り扱われないのは、強勢をおく語が話し手の考えによって変り、捕えにくいということに理由があると思われる。ここに改めて注意を喚起したい。

まず、強い強勢の置かれるものはどういうものか見てみよう。リズムの基礎となる、強くいう語は 2 種類に分けられる。強くいわれる度合いのいちばん多いものは、名詞と動詞である。ここでは品詞の区別が必要な知識となる。2 ばんめに強くいわれる度合いが多いのは、形容詞、副詞である。また、品詞を問わず疑問詞もここに入る。

2. 強勢 (stress) の強さについての問題点

ひとが話すときの強勢は“絶対的”なものではないということである。相対的なものであって、あるひとつながりの発話の中での比較的な強さである。“あるひとつながりの発話”といことは、“あるひと（個人）のしゃべったことば”と言いかえてよいが、同じひとのしゃべったことば（発話）の中でも、ある部分については、絶対的な強さで考えると、ちがっているということも起こる。ふつうの英語の場合[2]、ひとつの“息グループ”(breath group)[3] の終りに近いところのだいじな意味をもつ語に強い強勢を置くが、息グループが長くなると、前のほうの強い強勢と後の息グループの終りに近い強いストレスの絶対的な強さがちがってくる、というようなことも起こる。つまり、話しているひとが目立たせたいと思っている部分（ある語の強いシラブル）の強さは、発話の部分によって絶対的な強さが異ってくるのである。

強勢の使い方は、統語的、意味的な重要さと大いに関係している。英語の母語話者は、統語的分類をいちいち“名詞”とか“動詞”とかと関連づ

けて使い分けをしなくてよいが、外国語として英語を習得する人たちにとっては“内容語”という分類は、強勢に関してはとても役に立つ概念である。

インタビューアーの最初の発話では、明確な意志の伝達を考慮にいれて、内容語はすべて強い強勢（第 1、第 2 強勢）が使われている。Actor から film までの発話ではつぎのようになる。

> Áctor Dènzel Wáshington, ˆ wèll-knówn to the mòviegoing públic ¯ from sùch fílms as *Glóry*, ‖ Màlcolm X̌ and Philadélphia, ‖ was in Tókyo to promòte his nèw fílm ‖ , Crìmson Tíde. ‖ He was ásked if there was anything spécial ¯ that attrácted him ¯ to the róle ¯ in this fílm. ‖

D. ワシントンの最初の発話も同じことが言える。Basically から submarine. までの発話ではつぎのようになる。

> Básically, ¯ [ə:] in Crìmson Tíde, I was attrácted to the idéa ‖ of a fílm that ‖ [ə:] hàs a lárger sòrt of pícture, ‖ which is the possibílity of nùclear wár. ‖ And in the mídst of it ‖ there's a vèry | ìnteresting dráma that tàkes plàce between the twò ‖ lèading cháracters, twò màin cháracters, ‖ [ə:] in tèrms of their dífference of ‖ [ə:] philósophy about wàr and, and their dìfferent stýle of ‖ [ə:, ə:] rúnning a submàrine. ‖

すなわち、強勢と内容語との間には強い関係が見られる。しかし、強い強勢の中の第 1 強勢と第 2 強勢の使い方についてはまだ十分なルールづけができていなかったということである。

3. 第 1 強勢の決め方についての問題点

一般的に、「強勢」は、強いところと弱いところ、という 2 段階に分けて記述してある本が多い。つまり、ある文（発話）を話すときに強く言うところはどこか、ということが主な狙いである。しかし、強さについては、絶対的な強さから見ないで、比較的な強さということに重点を置いて聞いてみて、2 段階ではなくて 4 段階の区別をする必要がある。一つの方法として考えられるのは、①いちばん強い強さ（第 1 強勢「´」）②強く言うが第 1 強勢ほどではない（第 2 強勢「`」）③強くはないけど、全然力をこめて話さない強さよりは強い（第 3 強勢「ˇ」）④全然力をこめない、弱い強さ（第 4 強勢、または弱強勢。「ˇ」または何も記号をつけない）である。

しかし、実際にわれわれ英語に対する外国人が英語を聞いたり話したりするとき、4 つの強さの段階は、理論的には参考になるが、実利的効果は少なく、3 段階が適当である。実際の発話では、この 3 段階の強勢のほかに、もう一つの差が必要なのである。この別格ともいえる 4 つめの強勢は、「高さ」である。

「4 つめの強勢」ということの意味は、4 番目に強い強さというのではなく、「高さ (pitch)」を高くすることによって第 2 強勢と同じプロミネンス（注目度）を得るということである。特に文頭の 'I' に割合良く見られる。例えば、Washington が「自分の映画でどこが好きか」と聞かれて、

"$\overline{\text{I}}\downarrow$ enjóyed the scéne ... there's òne sort of bìg cónfrontation scène ... "

と答える冒頭の "I" は、高い高さで言うことにより第 2 強勢と同じ効果をもっている。「私はですねェー」という感じになっている。

強い強勢のところ（シラブル）はだいたい高さが高くなっている。強さと高さをどういう組み合わせで使うかについては、ほとんどどの本にも説

明がないが、高さに敏感な日本語話者には、聴き取りの際にも自分が話す際も、両分野においてじゅうぶん活用したほうがよい点である。ここで「活用する」と言ったのは、外国語として英語を学習するときに役に立つという意味である。英語が母語の話者がここを強く目立たせようとして強く言った、あるいは分析的に見て強く聞こえる、ということのほかに、日本語話者にとってどう見るべきかという立場があることに注意してもらいたい。これは学術的ではないということではない。英語の強勢分析のひとつの立場として認められるべきであるということである。

さて、高い高さの使い方には 2 種類ある。ひとつは、強い強勢と共に高く言うケースであり、もう一つは、いちばん強く（第 1 強勢）はないがその次ぐらいに注目させたいという強さ（第 2 強勢）と同じようにするケースである。“I↓”（私はですねェー）という感じの “I” を高く言うのが第 2 のケースである。この “高さ強勢” は人称代名詞（I とか he など）にふつう使われる。つぎの例もそうである。“Wàshington was ásked which scéne he↓ likes the móst in this ...”

4. “ひとくぎり集団” と強勢の関係

ここでいう “ひとくぎり集団” とは “breath group” といわれるものと同じである。何か話をするときに、発話の途中に息つぎを入れて私たちは話している。これは、ひとが吐く息を使って話す以上（吸う息で話す音をもつ言語はあるが、ほとんどの言語が吐く息を使っている）、その息を吸う必要があり、そのために息つぎがあるわけである。“息つぎ” は “息の休止” とはちがうものである。“息の休止” は、そこで息が切れてしまって、ひとつの発話の区切りとなる。しかし息つぎは、ひとつの語群（ここでいう “ひとくぎり集団”）の境である。つぎの例はインタビューアーのものであるが、｜の記号のところが “息つぎ” 部分である。

Actor Denzen Washington, | well-known to the moviegoing public | from such films as *Glory* ‖ *Malcom X* and *Philadelphia* ‖ was in Tokyo to promote his new film ‖ *Crimson Tide.* ‖

He was asked if there was anything special | that attracted him | to the role | in this film. ‖

息つぎ（|）は息が切れてはいないが、“息休止”（‖）は完全に息が切れている。ここで、「ひとくぎり集団」つまりよくいわれる breath group の処理に2つの見方が考えられる。

ひとつは、ひとつの“ひとくぎり集団”はひとつの第1強勢をもつ句または節である、とする考え方で、これは1960年代の Pike, Gleason の頃からの処理の仕方である。しかしこの処理は、分析するもの（学者）の主観的な分析であり、ある文を話すひと（話者）がどこを強く言うかという点から考え出したと思われる。つまり「ここは強く言いなさいよ」という母国語話者の立場をあらわしているのに過ぎない。その理由は、現実の発話例を聴いてみると、そのようにうまく第1強勢が配分されて出てきていないからである。

2ばんめの処理のしかたは、強勢（第1と第2）の置き方は意味の重要さとの関係で決められるのであるとするやり方である。例えば、例文の冒頭にある“Áctor Dènzel Wáshington | ...”では第1強勢は Actor と Washington の2ヵ所にあり Dènzel はその中間で第2強勢をもっている。ここでは“1-2-1”という強弱関係でリズムを作っている。リズムの谷は必ずしもいちばん弱い強勢（無標記）になるとは限らないのである。

ある発話のひとくぎり集団（句、節、文どれでもよい）にひとつの第1強勢がある、という処理のしかたは、自分が話すときの基準として大いに参考となる。例えば、例文の“Actor Denzel Washington |”において、息

つぎの点の前の強い強勢部 (Wásington) が第 1 強勢をとり、Àctor Dènzel の 2 語は共に第 2 強勢をとると考え、Actor に高い高さを置くとすれば "2°-2-1 | " (° は高い高さで発音するということ) でリズムは "強－弱－強" の形をとり、言いやすくなる。また、息つぎの前まで第 1 強勢のための息をとっておくということもできる。

一方、リズムを主体に考えると、"Áctor Dènzel Wáshington | " は "強－弱－強" のふつうのリズムパターンに入り、「意味の強い語 (内容語) が続いたときのひとつの典型的な形になっている。

ひとつのひとくぎり集団にひとつだけの第 1 強勢を認める立場と、ひとつ以上第 1 強勢があってもよいとする立場のちがいがあっても、どこをひとくぎり集団の境い目とするかは、物理的な息のつぎ目 (|) あるいは息の休止 (‖) としないといけない。意味上ここまでがひとつのひとくぎり集団としてまとまっている、というような主観的な見方で処理すると、音声的な文法から視点がはずれてしまう。つまり、あくまでも実際の音声現象 (話し方) と結びついていなくては、音声文法として成り立たないと言いたいのである。

5. 第 1 強勢と第 2 強勢の関係

第 1 強勢を置く部分 (語と言いかえてもよい) は、話し手が相手に伝えるのに大事だと思ったところであるが、もし意味上だいじと思った語が連続する場合、両方に第 1 強勢をつけると "強－弱－強 (山－谷－山)" というリズムが出にくくなる。そのため、片方を第 2 強勢に弱めて "強－弱－強" の形になるようにする。先に出した "Áctor Dènzel Wáshington" もその例であるが、そのあとの部分も調べてみよう。

..., wèll-knówn to the mòviegoing públic | from sùch fílms as *Glóry,* ‖

Màlcom X́ and *Philadélphia* ‖ was in Tókyo to promòte his nèw fílm, ‖ *Crìmson* Tíde. ‖

(1) well と known は両方共に内容語であり、well は known を補う形（修飾語）になるので known が第 1 強勢。

(2) moviegoing と public は public が名詞で、より重要なので public が第 1 強勢。

(3) such より films のほうが重点語なので両方共内容語だが sùch fílms となる。

(4) 名詞＋名詞は後のほうに第 1 強勢。

(5) nèw fílm も film が名詞で重点語。

(6) Crìmson Tíde も名詞＋名詞の例。

意味を伝えるのにだいじな単位を“内容語”（content word と言われているのに同じ）とすると、内容語には (a) 名詞、動詞、(b) 形容詞、副詞、(c) 疑問詞、が入る。(a)(b)(c) と分けたのは、重点度が (a) 1 ばん (b) 2 ばん (c) 3 ばんというように違い、第 1 強勢を置く程度に差があるからである。内容語の重点性を示す例が、上の発話に続く部分に出てくる。

He was ásked if there was anything spécial | that attrácted him to the róle in this fílm. ‖

anything special では special が内容語であるのに対し、一見名詞のような anything（代名詞）はそうではない、したがって第 1 強勢は special に置かれている。

6. 強勢と息つぎ、息休止との関係

一般的には（ということは主なルールとしてという意味であるが）、つぎのようなルールがたてられる。“息つぎまたは息休止の前の内容語に第 1 強勢を置く”。つまり “**c** → ´／＿ | か ‖ か #” ということである。（c は内容語というしるし）。しかし、第 1 強勢の代わりに第 2 強勢も可能である。したがって、**c** → ´(or ˋ)／＿ | , ‖ , or # ということになる。強勢を第 1 か第 2 にするかは、話者の意味の重点の置き方による、ということになる。

例として、Washington がインタビュアーに答える発話をみてみよう。

⑩, ⑬, ⑮ の前の内容語が第 2 強勢である。

Básically ① | in Crìmson Tíde, ② | I was attrácted to the idéa ③ ‖ of a fílm that ④ ‖ hàs a lárger ⑤ ‖ sòrt of pícture ⑥ ‖ which is the possibílity of nùclear wár. ⑦ ‖ And in the mídst of it ⑧ ‖ there's a véry ⑨ ‖ ìnteresting dráma that tàkes plàce between the twò ⑩ ‖ lèading cháracters, twò màin cháracters, ⑪ ‖ in tèrms of their dífference of ⑫ ‖ philósophy about wàr ⑬ | and their dìfferent stýle of ⑭ ‖ rúnning a submarìne. ⑮ ‖

“息つぎ” はジャンクチャー (juncture) と言われるようになってから、音素的な役割をもっているのかどうか、つまり文のある単位に意味上のちがいをもたらすかどうかについて考えられてきた。一つの立場は、句や節の区切りをつけて、異なる 3 つの意味のちがいを表わすと考えた。もう一つの立場は、音素的な特徴を与えないとするものである。

D. Washington の発話を分析してみると、息つぎには音声的にみて、つまりどういう音があるのかという点で、2 種類が見られる。(1) まったくのポーズと (2) “[əː]”という音が入っていながら発話が切れている感じを与えている部分とである。

ここで、息つぎ（息の完全休止はない）と息休止（息が完全に切れる）

の 2 種類を息のつぎ方として認めなくてはならない。息休止は“ポーズ”(pause) として認められているが、息のつぎ方としてはこれだけではないのである。

息のつぎ目は一体どのような役割をもっているのだろうか。アメリカの言語学では、ジャンクチャー (juncture 連接) という術語を使って、Trager[4] の頃から、分節素（意味を区別するのに役立つひとつひとつの音）をつなぐ役を持ち、音素としても役割をもっていると取り扱っている。しかし、個々のジャンクチャー（｜、‖、#）の意味的なちがいは「継続、疑問、終止」、などと区別をしているが、全体の発話のどういうところで使うのかという点はあまりはっきりしない。ひとつの音素的句の区切りを示すものという考えはよいとして、そのひと区切り（音素的句）が“意味上”なのか“術語上”なのか、あるいは“音声上”なのかは区別がない。

イギリスの学者たちは、ジャンクチャーという用語をあまり使いたがらず、音調群 (tone group) の区切りを示すものとしてポーズがある、という考えが多い。音声関係の本の索引に juncture とのっているのは少ない。

伝統的にイギリス系の学者は、プロソディ (prosody) という用語を超分節（音）素 (suprasegmental) の代りに使っているが、最近のものでは Pennington[5] が “Prosody” という章の中で “juncture” を取り上げている。これは比較的珍らしい。彼女はジャンクチャーをポーズ（息休止）の長さとして捕え、2, 3 秒息の休止があると‘‖’、0.3 ～ 5 秒の休止があると‘｜’のジャンクチャーととらえている。また Giegerich[6] の説をひいて、声門閉止音 (glottal stop:[ʔ]) をジャンクチャーに類するものとしてあげている。要するに、語と語の間に境界 (boundary) があるように聞こえさせるのがジャンクチャーになると考えているが、Trager たちの流れは、物理的な“息の休止”というのとはちがった考え方である。すなわち、音素の連続のひと塊まりにジャンクチャー（｜、‖、#のどれか）が区切りとし

てつくが、この音のひと塊まりには必ずひとつ第 1 強勢 (primary stress) があるとする。[7] これは、物理的あるいは意味的、統語的にどういうものであるかという言及をせずに、発話のひと区切りのしかたとしてジャンクチャーを使っている。しかし、第 1 強勢はひとつの音素的節の中ではいちばん強く言われる部分であり、節の終りにくるジャンクチャーも‘|’は「平坦」でつぎにつなげていく役目、‘‖’は「上昇」で音が上っていく(⤴)ように言われて“継続”を表わし、‘#’は音が下がって(⤵)息がそこで休止するといった、物理的に認められる音声的な特徴を土台としている。

D. Washington の発話の最初の部分を例にとって分析してみると、つぎのようになる。

> Básically | in Crimson Tíde, | I was attrácted to the idéa ‖ (⇒ |) of a fílm that ‖ (⇒ |) has a lárger ‖ (⇒ |) sort of pícture ‖ which is the possibílity of nuclear wár. ‖ (⇒#)

カッコの中は、「音素的節」の考え方(ひとつの節には 1 つの第 1 強勢と 1 つの終止ジャンクチャーがある)をあてはめてみた場合である。

この比較的短い発話の中でも、‘I was attrácted to the idéa ‖’と‘which is the possibílity of nuclear wár ‖’の 2 つの「節」と考えられる部分に、それぞれ第 1 強勢が 2 つずつあって、「音素的節」の考えにある“第 1 強勢はひとつ”という条件に合わない。

もし統語的な観点から、音のつながりぐあいをひと塊まり(節)と見るとすると、‘of a fílm that ‖’や‘has a lárger ‖’があてはまらない。前者は‘a film | that has a larger sort ...’となるのが適当だし(関係詞 that を節の頭にもってくるのが適当)、後者は‘a lárger sort ‖ of pícture ...’のほうがふ

さわしい（形容詞 larger と名詞 sort をつづけるのが適当）。したがって、ジャンクチャーを無視すれば、音の連続体のひと塊まりを規定する条件として成り立つが、それが無理であることがわかる。ただし、逆に、‘つぎに続く’という統語的な手がかりが残っていればジャンクチャーを自由に移動できるとする考え方なら成り立つ。

以上のように、音声的（音素的）あるいは統語的観点からのみの、音連続体のひと塊まりの決定はむずかしい。“音素的節”という考え方は、英語のネイティブ・スピーカーに心理的に存在する発話の区切りとして示し得ると思う。そして、英語を外国語として学習するものにとって、スピーキング（発話）の際、大いに参考になるということは言える。その理由は、ひとつの第 1 強勢とひとつのジャンクチャーをワン・セットにすることにより、発話の区切りをつけやすいからである。しかし、現実の息の休止という物理的現象とジャンクチャーを結びつけるのは恣意的すぎる。

したがって、物理的に音声的特徴として耳に入ってくるジャンクチャーは、発話のひとくぎりとして特に条件をもつことにならなくなってくる。

まとめ

音声言語としての英語は、日本語と大きくちがった特徴をもっている。応用言語学的に見ると、強勢 (stress)、音の高さ (pitch)、息つぎと休止 (juncture) に注目し、新しい整理が必要である。

1. 発話の内容を正確に伝えるために、主要な意味をもつ語（いわゆる内容語 content word）に第 1 強勢を置くが、内容語には 2 段階あり、第 2 段階の内容語には第 2 強勢を置く。第 1 強勢と第 2 強勢は共に“強い強勢”群に入る。
2. 強勢と内容語との関係は、名詞と動詞は第 1 強勢、形容詞と副詞、疑

問詞は第 2 強勢というのが原則的な結びつきで、この点では統語的な知識が十分な助けとなる。

3. 内容語が続く場合、第 2 強勢を使ってリズムの谷（弱いところ）を作る。例えば、Áctor Dènzel Wáshington において、Dentzel は原則からすれば第 1 強勢のところであるが、リズム ´ ` ´ を作るために '1 stress → 2 stress' となっている。
4. リズムは、強く言う語（第 1、第 2 強勢両方を含む）をだいたい一定の間隔をおいて言うことによって作る。この点は従来から言われている原則的なルールと変らない。
5. 高い高さが強い強勢（第 1 あるいは第 2 強勢）の代りに使われることがある。人称代名詞のうち 'I'（私は）その例である。これは「私は…」という意味で、強く言うのと同じだがリズムの関係で強い強勢を使えないときに起こる。
6. 息つぎと息の休止は、統語的あるいは意味的にひとくぎりとなる終止部分に起こるということはない。統語的、意味的にまだ続くことがわかるときは途中で息休止をしてよい。

注

1. *EJ on Tape*, pp.3-5, Jan. 1996. Tokyo: ALC. 分析材料として使う会話部分はつぎのようなものである。後半部分は「注」にのみ、資料と分析をのせてある。

   Interviewer Actor Denzel Washington, well-known to the moviegoing public from such films as *Glory*, *Malcolm X* and *Philadelphia*, was in Tokyo to promote his new film – *Crimson Tide*. He was asked if there was anything special that attracted him to the role in this film.

   Washington Basically, in *Crimson Tide*, I was attracted to the idea of a film that has a larger sort of picture, which is the possibility of nuclear war. And in the midst of it there's a very interesting drama that takes place between

the two leading characters, two main characters, in terms of their difference of philosophy about war and their different style of running a submarine.

Interviewer Since thìs fílm deals with the thrèat of nùclear wár, ‖ Wáshington was ásked his vìews on nuclear wéapons as detérrents. ‖

Washington I↓ am absolútely agàinst the ùse of nùclear wéapons. | [ə:] There's nò | púrpose that they sérve. | [ə:] There's no góod that can còme fròm them, ‖ and I am agàinst the úse of them. ‖

Interviewer Wàshington was ásked which scéne he lìkes the móst in this action-pàcked thríller, | Crìmson Tíde. ‖

Washington Dèfinitely nót when I get pùnched in the fáce. ‖ That's the wórst one. ‖

I↓ enjóyed the scéne ‖ there's òne | sort of bìg | [ə:] cónfrontation scène between Gene Háckman and mysélf, ‖ when I fìrst | [ə:] gìve him this méssage that we recéived ‖ and it énds up with us gètting into a big árgument. | That's my fávorite scene. ‖

| …息つぎ（実際にはっきり息は休止してない）

‖ …息の休止（息がはっきり切れている）

ˇ（‖ など）…声の高さが下がる。↘ということ。

ˆ（| など）…声の高さが上がる。↗ということ。

¯（| など）…声の高さが高低の中間にあり、続く感じ。→

↓（I↓ など）…高さが高→下により強い強勢の代わりをするもの。

2. ここではアメリカ英語で、この論で材料として使っている D.Washington のしゃべっているようなことば、を考えている。
3. 息の切れ目までのひとつの発話をさす。
4. Trager, G.L. & Smith, H.L. 1951. *An Outline of English Structure.* Oklahoma: Dattenburg Press.
5. Pennington, M.C., 1996. *Phonology in English Language Teaching: An International Approach.* London & New York: Longman
6. Giegerich, H.J., 1992. *English Phonology: An Introduction.* Cambridge U. Press
7. 田中他、1988「現代言語学辞典」、p.487. 東京：成美堂。